

令和 6 年 5 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00625

研究課題名（和文）漢字と仮名・平仮名と片仮名の関係史に着目した前近代日本語表記史記述の構築

研究課題名（英文）Description of the history of pre-modern Japanese writing focusing on the history of the relationship between kanji, kana, hiragana and katakana

研究代表者

矢田 勉（YADA, Tsutomu）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：20262058

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：いまだ整備されていない日本語文字・表記史の通史記述に必要な理論的枠組みを構築するとともに、記述すべき史的事実の掘り出しと整理を行った。

極めて複雑な様相を有する日本語文字・表記史の記述に当たっては、文体と表記体の関係の把握に困難がある。本研究は、漢字と仮名の関係史の視点から日本語表記史を分析することにより、日本語書記言語の記述に当たっては、仮名を基盤とする和文系書記言語と漢字を基盤とする漢文系書記言語をまず区別することが必要であることを明らかにし得た。

理論的基盤が確立されたことにより、論理的一貫性を有する日本語文字・表記史の通史記述の完成が見込まれる段階に至った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

歴史的研究の正しい発展には、通史記述がどうしても必要であるが、日本語文字・表記史に関してはこれまでそれが成されていなかった。本研究の成果により、その実現に必要な基盤が整備された。また、より上位の研究領域としての日本語書記言語史の構想が可能となり、その中における文字・表記史の位置づけも明らかとなった。更に、日本語の書記言語化、殊に和文系書記言語の方法による書記言語化には地域的格差が大きく存在していたことが明らかとなり、列島の文字生活史という観点から日本語文字・表記史記述を精密化する、という新たな研究課題も明らかとなった。これらは、将来のあるべき日本語表記を議論する際の基礎ともなりうるものである。

研究成果の概要（英文）：I built the theoretical foundation necessary for a comprehensive historical description of the history of Japanese writing and notation, which has not yet been developed, and organized the historical facts that should be described. When describing the extremely complex history of Japanese notation, it is difficult to understand the relationship between notation style and writing style. By analyzing the history of Japanese writing from the perspective of the history of the relationship between kanji and kana, this study shows that when describing Japanese writing languages, it is necessary to first distinguish between Kana written languages and Kanji written languages. Now that the theoretical foundations have been established, I have reached the stage where it is expected that a comprehensive historical description of the history of Japanese writing and notation will be completed that is logically consistent.

研究分野：日本語学

キーワード：漢字表記 平仮名表記 片仮名表記 和文系書記言語 漢文系書記言語 文字生活史

1. 研究開始当初の背景

歴史研究にあっては、通史記述はその最終的な目標であると同時に、研究の第二の始点となるものでもある。研究開始後の適当な時期にいったん通史記述が提供されることで、以後はその不備を補ったり、不正確な記述に修正を加えたりしていくことを通じて、研究の正常な発展が導かれるはずのものである。

しかし、日本語文字・表記史研究の場合、未だ通史記述が提供されないまま、長らく個別的研究が積み重ねられてきている。そのために、日本語文字・表記史にとってその核心に触れるであろう重要な事象と、些末的な事象とが研究者によっても明確に区別されていないという弊害が生じている。文字・表記は、それ自体が可視的な現象であって、史的事実を事実として報告するだけのことなら極めて容易であるから、その弊害は他の研究分野に比しても大きいものがあると言わざるを得ない。加えて、文字・表記史をその構成要素として含む書記言語史の総体の中で、文字・表記史はどのような位置を占めるべきものであるか、例えば文体史のような、書記言語史の他の構成要素とどのような関係にあるべきものであるか、といったことが明確にされていない、という問題も検討し残され続けてきた。

こうした点が未解決のままに放置されてきた理由は、ひとえに、日本語書記言語が表意文字としての漢字、表音文字としての平仮名・片仮名という三文字種を併存・併用させてきたというその複雑さを受け止めつつ、首尾一貫した筋道を通して記述することを可能とする理論的枠組みが構築されなかった、という所にある。それを解決し、日本語文字・表記史の通史記述を完成させるためには、それら三文字種の関係性の視点から日本語文字・表記史を再分析することがどうしても必要であり、それがこの領域の研究にとって、現時点での最優先されるべき急務であると考えられた。

これまでの日本語文字・表記史に関わる研究では、この三文字種併存の問題に関して、着目する事象の範囲に偏りが見られた。まず、三文字種のうち、平仮名と片仮名の関係性のみに着目したものが多く、その中でも、中世を対象とした議論が多かった。平仮名と片仮名の併存は中世のみならず、先行する中古にも、また後に続く近世以降にも厳然と存在した現象であるにも関わらず、中世の実態のみを基にして、両者の関係性(使い分け)が語られることが多かったのである。更に、漢字をも含めた三文字種の関係性、という視点には未だしきところが多分にあった。また、この問題は日本語史学のみならず、日本史学や日本文学の立場からも議論があったが、それぞれに特有の問題点があり、また、それぞれの領域の視点を統合するような試みを欠いているというところも、言語現象でありかつ文化現象でもある「文字・表記」の研究としては不十分であった。本研究は、こうした先行研究の陥穽の修正・補完の必要性に発しているものである。

2. 研究の目的

本研究は、日本語書記言語の最大の特質である、漢字・片仮名・平仮名の三文字種併用体系について、その文字・表記史の実態およびそれを維持した原理としての日本人の文字意識の変遷に関する通史的記述の完成を目論むものである。

漢字・片仮名・平仮名の三文字種を、漢字仮名交じり文という一つの表記体の中で使い分けるという方途は、近代になって漸く確立されたものに過ぎない。前近代における三文字種の関係性については、片仮名・平仮名の用途区分を中心に言及されてきたが、これまでの研究は、ある一時期のみを分析対象とするか、時代差を考慮せず一つの論理で説明しているために、その時代的変遷が分析されてこなかった。また、仮名と漢字との関係性を統合した視点もこれまでの研究史に欠けている。本研究は、そうした問題意識から、三文字種の併存とその関係性に視座を置いた日本語文字・表記史の通史的記述の枠組みの構築を目指す。各時期に書かれた漢字文・片仮名文・平仮名文の例を時系列に沿って出来る限り多く収集した上で、各々の筆者や成立事情・内容などを踏まえて、表記体選択の理由を分析し、各時代における三体系の用途の相違と重なりとを明らかにし、その変遷を記述する。

日本語文字・表記史の総体的な通史的記述は、漢字表記史・片仮名表記史・平仮名表記史のそれぞれが個別に完成されれば直ちに成し遂げられる、というわけではない。これら三つの表記体系は有機的に関連しつつ日本語表記体系の全体を形作っていたのであり、その関係性を厳密に明らかにし得て初めて本当の意味での総体的記述を成しうるのである。本研究の究極的な目的は、日本語文字・表記通史記述の完成の為の重要な基盤として、三文字種体系相互の関係性とその変化の様態を解明することである。

3. 研究の方法

三文字種・表記体相互の関係性のあり方を明らかにするためには、漢字文、片仮名文・漢字片仮名交じり文、平仮名文・漢字平仮名交じり文のそれぞれについて、実際にそれぞれの表記体を使用している資料を列挙し、それぞれが主として用いられる領域の傾向性を把握することは重要であり、先行研究が多く採ってきた観察の方法でもある。本研究にとっても当然それは基礎となるものであり、複製本・影印本・電子画像・原本に基づく調査によって、その情報をより充実させることを目指すのは勿論のことである。しかし、それだけでは本研究の目的にとって調査として充分ではない。この類の情報によって明らかにしうるのは、主としてそれぞれの表記体系が占める使用領域の中心に近い部分の在処であるが、相互の関係性やその変化の様相をより闡明に反映するのは、寧ろそのそれぞれの周辺部分でもあると見られるからである。

そこで、三つの表記体相互の関係性を、恣意的とも言うべき部分を必然的に含むという文字・表記現象の特質も踏まえた上で、より厳密に分析するために、本研究では、中古～中世、必要に応じて近世期を含む時期に書写の文献資料について、基本となる表記体情報や書写年代の情報に加え、内容、筆者（個人名および性別・官位・年齢などの属性）、一次的書写・転写の別（文書であれば正文・案文・写し等の別）、書写の方式（書誌学的情報や、全体書写か抄出か、など）、その他各資料の個別の事項といった情報を収集・整理する。その上で、同時期に書写され、かつ全く重なるかあるいは近接する内容でありながら表記体を異にする資料の組を、時系列に沿って出来る限り多く抽出する。その上で、各組に属する個々の資料について、上記～の情報と比較対照し、各時期に、それぞれの要素が表記体の選択とどの程度の強さの相関性を有しているか、定性・定量の双方から分析する。

しかしながら、この研究の最も難しい点は、表記体選択に相関する要因として取り上げるべきものの候補自体が必ずしも自明とは言えないところにある。そこで、特にに属する情報には注意し、表記体選択に作用する要因としてこれまでの研究で注意されてこなかったものがなかったかという点を常に慎重に確認し、相関の可能性が見いだされた場合にはデータ収集や分析にフィードバックしていく。最終的には、この一連の分析作業を通して、各時期における三種の表記体体系の選択領域の相違と重なりとを明らかにし、またそのあり方の通時的変遷を記述する。

資料の分析に当たっては、以下のような、先行研究に対する反省点に留意する。

第一には、これまでの研究は、ある特定の一時期における両者の共時的な関係性のみを分析の対象とするか、あるいは時代差を考慮せずに、両者の関係性を汎時代的に一つの論理で説明しようとしているために、片仮名文・漢字片仮名交じり文と平仮名文・漢字平仮名交じり文との関係性が時代と共に変質を遂げていった通時的様相が分析されてこなかったということである。例えば、平安期・院政期の片仮名文・漢字片仮名交じり文は、そこに混用される漢字は頓写的な書体であることが通例で、片仮名も時として連綿を含む速写の跡が窺われるものである。即ち、この時期の片仮名文・漢字片仮名交じり文は、草稿的な性質を強く有するテキストに多く見られるのである。鎌倉時代にも、当初はなおその傾向が強いが、鎌倉時代後期・南北朝期頃に至って、丁寧に、端正な書体で転写された片仮名文・漢字片仮名交じり文テキストが多く現れるようになり、片仮名を巡る文字意識がこの間に大きく変化しつつあったことが知られる。近世の板本になると、片仮名は楷書体漢字と併用されることが基本的なあり方になるが、そこに繋がる変化がこの時期に生じつつあったことになる。一方で、平仮名文・漢字平仮名交じり文については、特に和歌集に関していえば、平安時代後期、即ち11世紀までには既に能書の染筆になる写本が生じ、鎌倉時代にはそれが散文文学の写本にも及び、つまり、院政期・鎌倉時代初期には、片仮名と平仮名とは、そのまま転写されることを前提としないような速写用の文字体系と、転写されることをも前提とするように美的に成熟した文字体系という傾向差があったが、鎌倉時代後期以降になって片仮名にも転写を前提とするような書かれ方が増えてくることで、その点に関しての両文字体系間の質的相違は縮まっていったのであって、それぞれについてのこうした時代的変化を無視して、片仮名文・漢字片仮名交じり文と平仮名文・漢字平仮名交じり文との用途の区別や関係性といったことを議論することは、重要な視点を欠いたものと言わざるをえない。

第二には、本来、片仮名と平仮名の関係性は、仮名と漢字との関係性とも同じ水平面上で分析されるべきものであるにも関わらず、そうした視点をこれまでの研究史は十分に持ち得て来なかったという点がある。前近代における片仮名と平仮名の関係性を現代から理解することの難しさは、その使用領域が截然と分離しているわけではなく、重なる部分があるように思われるところに一つの原因がある。実は、例えば現代における縦書きと横書きの選択基準がそうであるように、表記現象に関しては、寧ろそうしたことが常態とあって良いのであり、そうした曖昧さをその本質の一部として正しく捉えることが研究上も必要であるにも関わらず、漢字と仮名の用途区分については、比較的その境界が明確であると考えられてきたきらいがある。中古に関して言えば、確かに記録（男性日記）は変体漢文、和歌は平仮名文というようにはっきりと領域が分かれるように思われるのであるが、しかし例えば院政期・鎌倉期の男性間の書状には、変体漢文によるものと同様に平仮名文によるものが見えるのであって、どのような用途でも両者の選択に重なりがあり得ないわけではない。このように、両者の関係性の捉え難さは、漢字と仮名の間にも確かに存在するのであるが、それがこれまでの文字・表記史研究では必ずしも正しく掬い上げられて来なかった、ということである。やがて室町期・江戸期になると、幼童に対する書状などの特異な場合を除けば、男性間で仮名消息を使用することはなくなっていくが、ここにも文字

体系相互の関係性の変化がやはり見られるのであって、平仮名・片仮名の関係性だけをそこから切り離して取り扱うことが必ずしも正しい方法とは言えないことは明らかである。

4. 研究成果

本研究は、特にその当初3年間において新型コロナウイルス感染症蔓延の時期に当たり、計画段階で予定していた文献資料の各所蔵機関における現物調査に関しては、大幅に縮小せざるを得なかった。しかし、その分、既公刊・公開されている資料や、現物そのものを入手することを得た資料に関する調査は、質・量ともに計画以上に行うことを得た。

そうした調査およびその分析の結果、日本語文字・表記史の通史記述の実現に必要な理論的枠組みを整備し得た。また、より上位の研究領域としての日本語書記言語史の構想が可能となり、その中における文字・表記史の位置づけを明確にすることもできるようになった。その一部を示すならば、これまでの日本語書記言語史研究で大きな障壁となってきたことの一つに、日本の書記言語としての漢文・変体漢文を表記体として位置づけるべきか、文体として位置づけるべきか、という問題が未解決であったことが挙げられる。この点に関して、日本語書記言語に関しては、表記体・文体の区分に先だって、仮名を表記機能の基軸に置く和文系書記言語と、表意文字としての漢字を表記機能の基軸に置く漢文系書記言語との区分があったと設定することで、論理的に矛盾のない一貫した日本語文字・表記史の通史記述ができることが明らかとなった。更に、この和文系書記言語と漢文系書記言語の二途は日本語書記言語史のほとんどの部分でそれぞれ併存・併用され続けつつも、漢文系書記言語は、古代における、訓読によってはじめて言語的実現形が完成されるあり方から、次第に予め言語的実現系を明確に内包したあり方へと変化し、一方で和文系書記言語が、正訓字の使用をはじめ、次第に漢文系書記言語のあり方を取り込んでいったことによって、両者の性質は緩やかに接近しつつあったという、日本語書記言語史の大きな流れを描くことも可能となった。

こうしたフレームワークに基づき、それぞれの表記体に関連した文字・表記史的現象を有機的に配置することによって、日本語文字・表記通史の完成を近い将来に期することが可能な段階に至った。現在、上代・中古・中世・近世についてはひとまずの文章化をほぼ終えており、今後は近代以降に関する記述を行うとともに、全体的に更なる調整を加えることを目指している。

更に、本研究には、いくつかの重要な副産物的成果があった。

その第一は、日本語の書記言語化、特に和文系書記言語の方法による書記言語化には大きな地域的格差が、近世・近代に至るまで大きく存在していたことが明らかとなったことである。ここから、列島の文字生活史という観点を据えたうえで日本語文字・表記史記述を精密化する、という新たな研究課題も認知されるに至った。

その第二には、これまで資料の乏しかった中世期の書字学習・書字教育について、所謂「朝鮮資料」がその実態をよく反映しているものであることが明らかとなったことがある。この段階では、変体漢文習得の前段階として平仮名主体表記による書簡文の習得があり、それによって漢文系書記言語と和文系書記言語との間に通路が開かれていたことも判明した。

更に、これまで多くは特殊な書字技法と考えられてきた平仮名文の「散らし書き」が、行書きの平仮名文と大対立をなす、日本語表記史における基盤的表記体の一つであったことを明らかにしたこと、「見」を崩した文字は資料あるいは資料群によって平仮名として使用されたり漢字（正訓字）と使用されたりしており、そうしたところにも平仮名と漢字の連続面がうかがわれることを明らかにしたこと、などは、日本語文字・表記通史において重要な要素を成す事実の発見であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 矢田 勉	4. 巻 15
2. 論文標題 漢字通用の排除と近代的表記意識	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 48-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢田 勉	4. 巻 16
2. 論文標題 日本語学会の社会的役割と『日本語学大辞典』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本語の研究	6. 最初と最後の頁 34～41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20666/nihongonokenkyu.16.1_34	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 矢田 勉	4. 巻 1
2. 論文標題 中世初期旧仏教寺院における文字生活 明恵上人とその周辺を例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高山寺経蔵の形成と伝承	6. 最初と最後の頁 50-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢田 勉	4. 巻 24
2. 論文標題 中世後期・近世書字教育史資料としての朝鮮資料	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 近代語研究	6. 最初と最後の頁 61-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢田 勉	4. 巻 35
2. 論文標題 明治期日本語表記の革新性と限界	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 EEA Booklet	6. 最初と最後の頁 1-22
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 矢田 勉
2. 発表標題 「見」の字史 「見」は原文では変体仮名 / 草書体漢字
3. 学会等名 日本語学会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢田 勉
2. 発表標題 平仮名の基盤的書記様式としての散らし書き
3. 学会等名 訓点語学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 矢田 勉
2. 発表標題 中世後期・近世書字教育史資料としての朝鮮資料
3. 学会等名 訓点語学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日本漢字学会、吉川 雅之、荒川 慎太郎、笹原 宏之、清水 政明、蘇 柳朱、矢田 勉、山下 真里	4. 発行年 2022年
2. 出版社 花鳥社	5. 総ページ数 184
3. 書名 漢字系文字の世界	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------